

東北地方における弥生土器の形成過程

The Formation Process of Yayoi Pottery in Tohoku District

高瀬克範

はじめに

①編年の問題点

②大洞A'式の上限

③大洞A'式直後の土器群

④広域編年への位置づけ

おわりに

【本文要約】

東北地方における縄文時代終末期の土器編年は、とくに大洞A'式土器の理解をめぐって混乱が続いている。大洞諸型式の認識は、東日本の縄文時代晩期・初期弥生時代土器研究に大きな影響力をもつことから、この問題の整理が肝要である。ここでは、東北最後の縄文土器とされる大洞A'式の範囲を規定し、その後の土器群の変遷を小地域ごとにあとづけることで、この問題の再検討を試みた。

山内清男による大洞A'式設定経緯と現在の資料とのつきあわせから、大洞A₂式の設定をみとめつつ、変形匹字文の沈線化をもって大洞A'式の上限を規定した。この際、当該期の文様を3つの系列に整理し、これまで考えられてきたような典型的な変形匹字文からだけではない変形工字文の多元的な発生を論じた。大洞A'式までの段階には、東北地方のなかに器形の面での地域性がみられるものの、文様に関しては規格性のたかい部分を保持していた。よってこの段階を、東北の一体性がたもたれていた最後の段階と考えた。

つぎにその直後と考えられる土器群への変化を、東北北・中・南部の各地域ごとに検討した。その結果、東北北部における初期弥生土器とされる砂沢式には、大洞A'式とは型式として区分されるに十分な基準がみとめられ、青木畑式・御代田式といった東北中・南部の土器群と並行関係にあることを推察した。この成果を関東・中部・東海・近畿地方の広域編年に照らしあわせ、大洞A'期が畿内第I様式中段階に、砂沢期が畿内第I様式新段階に並行する編年観をみちびくに至った。